

福祉系 対人援助職養成の 現場から

西川 友理

福祉系教員にとって夏は、実習訪問の季節。

社会福祉士などの実習では、定期的に教員が実習先に赴き、指導を行います。長期休みに集中して実習をする学生が大勢いるので、夏は結構、東奔西走することになります。

私は自分の専門と関連して、児童養護施設や障害者支援施設に実習巡回指導をする機会が多くあります。その際に、実習担当者さんとお話をする場で、施設長さんが同席されることが増えてきました。施設長さんいわく、来春の卒業生の中で、うちで働きたい、と言う人はいませんか、とのこと。何だったら来月からでも！いや、今すぐ！という施設もあります。

この就職難のご時勢に、福祉の現場は人手不足です。メディア等では高齢者施設の

人手不足や労働状況を報道する機会はよくありますが、児童養護施設でも、障害者支援施設でも、同じような状況があります。

「福祉職に就きたくなる理由」

今、福祉現場で働きたい、という学生はもちろんいます。

それらはどんな学生か。

福祉が楽しい、面白い、すごい、意義がある、と思った学生です。

ボランティアや実習など、現場でそれらを体験した学生は、こちらが水を向けると大興奮して話をしてくれます。

特に、利用者さんとの関わりが楽しかった、という学生と同じ位、職員さんの姿に影響されてくる学生が大勢いるようです。

「先生、実習大変ですわ」と、ある学生

が言う。「何が大変って、毎日の実習が終わった後の反省会。毎日1時間以上あるんですよ！」職員さんが反省会の中で、熱く語って下さって、思わず議論になっちゃって、なかなか終わらない、とのこと。大変大変と言いながら、顔は嬉しそうに、どんな話をしたのか、熱っぽく語る学生。彼はそのまま、その施設でのアルバイトを始めました。

また別の口下手な学生が、特別養護老人ホームのボランティアに行ってきたと言う。「先生、あの施設の職員さんの笑顔って、凄いですよ。利用者さんと目が合った時にね、職員さんが微笑んだら、利用者さんも微笑むんです。喋らなくても、コミュニケーションって出来るんですね。」人付き合いが苦手だと言っていた彼は、その経験から3年後、高齢者分野に就職したいんだ、と話してくれました。

高齢者の在宅サービスでの経験が素晴らしかった、と言う学生。「介護保険とか、年金って、教科書の中の事だと思ってました。いやもちろん、実際動いている制度だって知っていたけれど・・・面接場面を見学させていただいて、ワーカーって、制度を、人の生活に合わせて『ほんまに』活用できるようにする仕事なんやなあって、解りました。」この学生は、相談援助業務の仕事を現在探しています。

まずは利用者さんと関わることが好き、何とかしたい社会問題がある、そういう思いを持って、福祉に興味を持ち、進路を進めてきた学生たち。そんな学生たちが、福祉の現場で、「面白くて、意味があり、責任もある、ワクワクする仕事」ということを体現している職員さんの姿を見る。「ね、これがあるからこの仕事、やめられへんの

よ！」と笑う職員さん。「いつかはこんな支援をしたい」「こんな施設にしたい」と、語り始める職員さん。目の前の人の話を、全身で傾聴し、支援する職員さん。

もう仕事が好きで、楽しくって仕方がない！という福祉職の生の声を聞き、その空気に触れる。そのうちなんだか、福祉の仕事で楽しくやっていることがうらやましく見えて、自分も、こんな風に働きたいなぁと思いはじめる。そうすると学生たちは、福祉職に就く、と思いを、現実のものとして考え始めるように思います。

「魅力を伝える・魅力が伝わる」

対人援助職の現場の方々には、是非、「この仕事はこんなに充実していて、こんなに楽しい！」という姿を学生に見せていただければ、と思います。

そのためには、職員さんたち自身が、楽しく仕事ができなければなりません。つまり、自らの労働環境を整えることが不可欠だと思います。給与、福利厚生、人間関係等、様々な面から、改善をしていく。そうすればより、その職場は魅力的になっていく。その場で働いているのが嬉しい、楽しい、という雰囲気は、その場に関わる人たちに必ず伝わると思います。

対人援助職の人々がより気持ちよく働ける事が、明日の福祉職を作っていくことになると、そのように思うのです。